

# 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の人間関係

廣谷 速人

京都市

## 第1章 はじめに

松岡外科病院の後継者であった内藤一男は、松岡道治元教授は狷介<sup>1)</sup>、孤高<sup>2)</sup>な性格であると評したが、松岡の開業後数年にして出版された人物誌では、「資性質朴敦厚にして人格崇高な」「学究的好紳士」と記述されている<sup>3)</sup>。

そこで筆者は、東京帝国大学医科大学卒業後から京都帝国大学医科大学を依願免官するまでの間の松岡と恩師、先輩、同僚らとの主なる交流を検討し、松岡の性格を推論することとしたい。

## 第2章 済生学舎講師就任

東京帝国大学医科大学助手であった明治33(1900)年に、松岡は済生学舎の講師を兼任した<sup>4)</sup>。この人事は、同年海外留学のため長年務めた講師を辞した田代義徳(帝国大学9年先輩)<sup>5)</sup>の後任というべきもので、田代の推薦によるものと推察される。なお松岡と同時に講師を兼任することになった中山森彦<sup>6)</sup>は松岡の5年先輩に当る。

この人事から、松岡は当時、これら先輩からその学力を十分評価されていたものと判断できる。

## 第3章 松岡の京都帝国大学 木下総長への直訴

### 第1節 義弟木原岩太郎の客死

松岡の妹イト<sup>7)</sup>の夫である木原岩太郎<sup>8)</sup>は、京都医科大学耳鼻咽喉科学教授予定者として明治33(1900)年7月27日にドイツ留学へ出発したが、航海中風邪気味、下痢<sup>9)</sup>あるいはベスト<sup>10)</sup>あるいは肺炎<sup>11,12)</sup>に罹患したと伝えられた。木原は9月7日にベルリンに到着したものの、29日に至って

急性肺炎を発して友人の懇篤なる看護もその甲斐なく10月7日に死去した<sup>12)</sup>。

山根正次<sup>8)</sup>は野田忠廣(内務省技師)<sup>13)</sup>とともにおよび第一回万国医務会議(7月23-28日)<sup>14)</sup>および第十三回万国衛生会(8月2-9日)<sup>15)</sup>の日本政府委員として派遣されて<sup>13)</sup>パリに滞在していたので、同郷の先輩として急遽ベルリンへ赴いたと思われる。遺骨は兩人によって遠くチューリングゲン州ゴータで茶毘に付され<sup>12,16)</sup>、12月25日に故国へ持ち帰られ、同月28日には東大皮膚科微生物学教室あげての盛大な追悼会が催された<sup>17)</sup>。

### 第2節 木下総長への直訴

京都大学大学文書館所蔵の資料<sup>18)</sup>によれば、松岡は自ら上洛して第一高等中学校生徒時代の校長(明治22〔1889〕年一同25〔1892〕年)<sup>19)</sup>であった京都帝国大学木下廣次総長に面会したのちに書簡を送り、「願わくば耳鼻咽喉科をして岩太郎道治の手に委せしめば不肖決して先生の御厚志に誓って背かざるべし」と記している(図1)。その日付は「12日」となっているだけで何月かは明らかでないが、おそらく木原の追悼会<sup>17)</sup>のすぐあと、すなわち明治34(1901)年の1月12日ではないかと推測される。

## 第4章 松岡教授の新年広告

松岡は京都医科大学教授に任ぜられてからは地元『京都医事衛生誌』<sup>20)</sup>の1月号に新年挨拶の広告を同僚教授らとともに毎年掲載していた。ここに例示した明治44(1911)年1月号<sup>21)</sup>(図2)では、ほかに今村(精神医学)、松下(衛生学)、和辻(耳鼻咽喉科学)、伊藤(外科学第二)、岡本(法医学)、

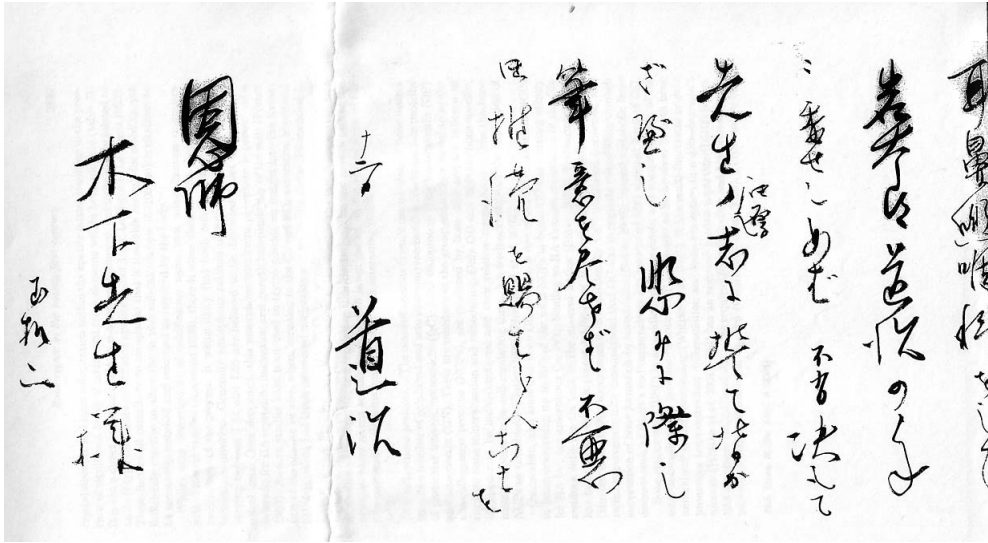


図1 木下広次宛道治書簡<sup>18)</sup>

(七十九) 號二百二第誌生衛事醫都京

謹賀新年 東京市小石川西丸町 醫海時報社	謹賀新年 東京二階堂保則	謹賀新年 上京區吉田町中六路 松岡道治	謹賀新年 上京區車庫町一橋上ル 和辻春次	謹賀新年 上京區吉田町中六路 松下禎二	謹賀新年 上京區寺町通廣小路下 今村新吉
謹賀新年 中立廣聖町西入	謹賀新年 愛宕郡田中村砂川 賀屋隆吉	謹賀新年 上京區吉田町 岡本梁松	謹賀新年 上京區町通今出川上ル西入北横町 伊藤隼三	謹賀新年 東京市町區常七見町六丁目 山谷徳次郎	謹賀新年 東京市小石川西丸町 田中義一

図2 京都医事衛生誌 (明治44年1月号) 広告<sup>21)</sup>

賀屋 (内科学第三), 中西 (内科学第二) ら<sup>22)</sup> の名前が見える。

なお田中義一<sup>23)</sup> は前年11月に陸軍少将, 歩兵第二旅団長に任ぜられていて, 山谷徳次郎<sup>24)</sup> は医海時報社主, 二階堂保則<sup>25)</sup> は当時内閣統計局技師であった。

この年賀広告は, 松岡が孤高を守り世間的な付き合いが悪かったとは考えられないことを如実に示す証拠といえよう。

### 第5章 松岡教授の饗宴

松岡が京大内外の京都医界の権威を多数招いて一大饗宴を催したこと<sup>26)</sup> は, 今日までまったく知られていない。

宴会は明治42 (1909) 年11月21日午後7時から都ホテルで開かれた<sup>26)</sup>。この前日には, 宿泊していた竹田宮恒久王が久邇宮, 同妃, 朝香宮, 東久邇宮, 梨木宮と晩餐会を開いていて<sup>27)</sup>, 当時同ホテルでの宴席は極めて高踏的なものであったと考えられる。

出席者は, 菊池大麓京都帝国大学総長, 木下廣次初代同総長, 伊藤隼三附属医院長以下, 医科大学の同僚教授13名 (当時の医科大学教授は全員で18名<sup>28)</sup>), 学外からは池田 (鹿)<sup>29)</sup>, 斎藤仙也<sup>30)</sup>, 佐伯理三郎<sup>31)</sup>, 新宮涼庭<sup>32)</sup> ら, 当時の京都医界の重鎮が出席して, 総計三十余名を数えた<sup>33)</sup>。

席上伊藤博士は「咳一咳莞爾として起立して云う余の聞く処に抛れば松岡教授は近頃内室を迎えられしと今夕は必ず之が為めの祝宴にして初めて優顔を拝せらるゝ事と思し多用を曲て出席せしに其事なきは如何」と述べ、満場哄笑したと報じられている<sup>26)</sup>。

このように描写された宴会の雰囲気は、後世云われた伊藤、松岡の確執<sup>12,34)</sup>を否定するに十分な証拠であるが、両者は単に東京大学だけでなく、実はその予備課程でも先輩、後輩の関係にあったのである<sup>35)</sup>。

この饗宴の記事には夫人が出席したという記述はない<sup>26)</sup>ので、結婚披露宴でないことは明白であるが、「久々懇親を暖めん迄」<sup>25)</sup>饗宴の真の意図は測り知り得ないところである。

なおホテルでの結婚披露宴は、東京では明治の半ば以降行われ始めた<sup>36)</sup>が、京都の結婚式は婚家で披露宴は料亭か貸席で開くことがすでに江戸時代から定着していた<sup>37)</sup>ので、京都では大正末期になって始めて行なわれた<sup>38)</sup>。

なお松岡と山本伊兵衛<sup>39)</sup>の長女つな<sup>40)</sup>との結婚が届け出られたのは、明治44(1911)年8月<sup>41)</sup>、すなわちこの饗宴の約2年後のことであった<sup>42)</sup>。

## 第6章 第9回日本外科学会 評議員会の決定

### 第1節 次回会長予選

松岡が退官する前年の大正2(1913)年3月31日に開催された第14回日本外科学会の評議員会<sup>43)</sup>の次回会長予選で、三輪博士<sup>44)</sup>、松岡博士、山形博士<sup>45)</sup>の3名の名前がこの順に挙げられた。

松岡が明治2〔1869〕年生れで明治30(1897)年の東京帝国大学卒業である<sup>3)</sup>のに対して、三輪教授<sup>44)</sup>は安政6(1859)年生で明治19(1896)年卒、山形教授<sup>45)</sup>は安政4(1857)年生で明治14年卒と、ともに相当年長であり、大学の先輩である。

また医学博士授与の時期は、三輪は明治34(1901)年<sup>44)</sup>、山形<sup>45)</sup>と松岡<sup>3)</sup>はともに明治38(1905)であり、さらに教授(教諭)就任年次を見ると、三輪は明治22(1889)年(第一高等中学校医学部)<sup>44)</sup>、山形は明治14(1881)年(岡山県医学

校)<sup>45)</sup>と、松岡の明治40(1907)<sup>3)</sup>に比べて格段に古い。

すなわち学会会長候補としては年齢、卒業年次、学位授与歴、教授歴すべてにおいて、松岡は他の2候補に比べて格段に若く、教職歴も短い。このことは、当時の外科学会に於ける松岡の高い評価を示すものと考えられる。

三輪教諭は翌大正3(1914)年<sup>46)</sup>に、山形教諭は大正6(1917)年<sup>47)</sup>にそれぞれ会長を務めているところから、松岡も辞任していなければ、かれらと同様に早晚、あるいは先んじて、日本外科学会総会会長の荣誉に輝いたであろうことは疑いのないところである。

### 第2節 次年度宿題報告担当指名

さらに同評議員会では、次年度の日本外科学会宿題報告として「関節結核」が採択され、担当者として、田代博士(東大整形外科)<sup>5)</sup>、松岡博士、住田学士(九大整形外科)<sup>48,49)</sup>が指名された<sup>43)</sup>。

しかしこの整形外科三帝大教授の揃い踏みは、松岡の辞職によって日の目を見ることはなかった。翌年の外科学会での宿題報告で、住田教授は「近く京都大学松岡教授の病氣退職させし為又右宿題の責任をも辞され、終に不得已田代教授と共に宿題全部の責任を分たざるべからずに至りぬ」と宿題報告担当者の責任の重さを訴えている<sup>50)</sup>。

## 第7章 結び

本編では、従来あまり知られていなかった恩師、先輩、親族との交流を取り上げた。すなわち東大助手時代には先輩とともに済生学舎の講師に就任し、京大総長へ客死した義弟木原岩太郎の遺志継承を直訴した。

京都帝国大学教授になってからは、地元医学雑誌へ毎年新年広告を同僚教授らとともに掲載し、京都帝国大学内だけでなく京都市内の指導的医師を招いて饗宴をホテルで催した。

第9回日本外科学会(大正2〔1913〕年)では先輩とともに次期会長候補に推薦され、宿題報告の担当者にも指名された。

これらの事績は、松岡自身への周囲の高い学問

の評価と松岡自身の協調性を如実に示し、従来伝えられてきた松岡への風評を明確に否定するものである。

## 謝 辞

稿を終わるにあたり、松岡家戸籍謄本を開示頂いた松岡昭三（大阪市）・國雄（西宮市）両先生、木原家についてご教示頂いた翠川百合子先生（京都市）に深甚の謝意を表します。

## 注（引用文献および注記）

- 1) 内藤一男. 京大初代整形外科教授松岡道治博士の最晩年のあれこれ. 京整会報 1985; 49: 8-0.
- 2) 内藤一男. 松岡道治先生の思い出. 京都大学医学部整形外科学教室編集兼発行. 京都大学医学部整形外科学教室開講 80年記念誌, 1986; 6-15.
- 3) 井関九郎. 博士松岡道治君. 現代防長人物史 人. 淀橋町（東京）: 発展社; 1917. ま 28-29.
- 4) 夏学期開講（内外雑報, (一) 舎報）. 済生学舎医事新報 1900; 88: 375

なお京都帝国大学への転任のため翌年3月に辞職した<sup>①</sup>.

①講師の更迭および増聘（内外雑報, (一) 舎報）. 済生学舎医事新報 1901; 100: 367

- 5) 田代義徳（元治元〔1864〕年—昭和13〔1938〕年）<sup>①, ②</sup>は栃木県足利郡山邊村（現・足利市山辺町）に生まれ、19歳で中津藩侍医の家系の田代基徳の養嗣子となった。明治21（1888）年に帝国大学医科大学を卒業、翌年から私立済生学舎講師を務めた。明治26（1893）年に大学院へ入学した<sup>③</sup>が、明治33（1900）年外科的矯正術研究のため独逸へ留学、同37（1904）年帰国、同39（1906）年5月教授に任ぜられ、整形外科学講座を担当し、大正13（1924）年に退官した。

①天児民和. 田代義徳教授. 九州大学整形外科学教室同窓会編集兼発行. 整形外科を育てた人達. 1999. p. 347-350

②東大整形外科百周年事業委員会. 初代教授 田代義徳（第2章 歴代教授と教室）. 東京大学整形外科学教室百年史; 2008. p. 107-110

③帝国大学編集兼発行. 田代義徳（第十九章 学生及生徒姓名, 第一大学院, 外科中癩病病理及療法）. 1895. 帝国大学一覧 従明治廿七年 至明治廿八年; 1895. p. 289

- 6) 中山森彦（慶応3〔1867〕年—昭和32〔1957〕年）<sup>①, ②</sup>は京都市上京区室町通出水の典薬寮医官の家系に生まれ、明治25（1892）年に帝国大学医科大学を卒業、翌年軍医となった。当時一等軍医で陸軍軍医学校教官を勤めていた<sup>③</sup>。明治35（1902）年にドイツへ留学

し、明治40（1907）年には京都帝国大学福岡医科大学（九州帝国大学医科大学）教授として外科学第二講座を担当し、大正6（1917）年に退官した。

①井関九郎. 医学博士 中山森彦. 日本医学博士録 第貳巻 医学博士之部（其之壹）. p. 医博 100-101

②井関九郎. 森正道, 中山森彦. 批判研究博士人物. 東京: 発展社出版部; 1925. p. 外科 310-311

③内閣官報局. 軍医学校（陸軍省）. 職員録（甲）. 明治三十三年; 1900. p. 190-191

- 7) 松岡イト<sup>①</sup>は藤蔵の二女として明治5（1872）年に生まれた。明治24（1891）年3月山口県尋常師範学校を卒業して小学校訓導を勤めたのち、明治27（1894）年5月に木原と結婚した。昭和19（1944）年死去。

①廣谷速人. 京都大学整形外科学初代教授松岡道治の生い立ち. 日本医史学雑誌 2012; 58(3): 393-400

- 8) 木原岩太郎は慶応3（1867）年12月<sup>①</sup>、周防国佐波郡佐和（現・防府市佐和）の広い塩田を持つ家に生まれた<sup>②</sup>。実家は塩田を広く持14歳にして東上、山根正次<sup>③</sup>宅に寄留<sup>④</sup>、明治27（1894）年に帝国大学医科大学を卒業し、外科学教室助手<sup>⑤</sup>に任命され、明治28（1895）年3月狙撃されて負傷した李鴻章日清戦争講和全権大使の治療のため、外人教師スクリバとともに馬関（下関）へ出張した<sup>⑥</sup>。同年6月に熊本県人吉病院長<sup>⑦</sup>として赴任、県立福岡病院外科部長<sup>⑧</sup>を経て明治32（1899）年東京帝国大学大学院（伝染性皮膚病学専攻<sup>⑨</sup>）へ進み、皮膚科病科助手に任ぜられた<sup>⑩</sup>。木原の真菌症に関する論文<sup>⑪</sup>は現在も引用されている<sup>⑫</sup>。

①山根正次. 祭木原岩太郎君文（雑報 故医学士木原岩太郎氏の追悼会）. 医事新聞 1900; 582: 161-162

②翠川百合子私信（平成24年11月13日）.

③山根正次（安政4〔1857〕年—大正14〔1925〕年）<sup>④</sup>は、眼科医の次男として長門国萩香川津村（現・山口県萩市椿東香川津）に生れ、明治7（1874）年長崎医学校へ入学したが、同年同校が廃校になった<sup>⑤</sup>ため東京医学校へ転じて明治15（1882）年に東京大学医学部を卒業し、同年長崎医学校一等教諭、長崎病院内科医長に任命された<sup>⑥</sup>。明治20（1887）年から同24（1891）年まで司法省より英仏への留学を命じられ<sup>⑦</sup>た。帰国後警視庁医務局警察医長<sup>⑧</sup>に任ぜられ、明治24（1891）年から大正2（1913）年まで警視庁衛生部長<sup>⑨</sup>を務めた。明治35（1902）年から衆議院議員（当選6回）を務め、明治37（1904）年には私立日本医学校（現・日本医科大学）の校長に就任した。

【⑩田中助一編. 萩の生んだ近代日本の医政家山根正次. 萩: 大愛会; 1967. p. 6-34 ⑪長崎大学医学部編集兼発行. 内科学教室（附録（二））. 同上書. p. 9-11 ⑫手塚晃, 国立教育会館. 山根

- 正次. 幕末明治海外渡航者総覧 第2巻, 人物情報編. 東京: 柏書房; 1992. p.455 ④内閣官報局編集兼発行. 警察医長 (警視庁, 医務局). 職員録 明治二十五年 (甲). p.418 ⑤秦郁彦編. 衛生部長 (内務省, C 警視庁). 日本官僚制総合事典 1868-2000. 東京大学出版会; 2000. p.110
- ④木原学士 (人事彙報). 東京医事新誌 1895; 882: 374
- ⑤スクリパ氏及木原学士 (人事彙報). 同上誌 1895; 887: 593 & 889: 688
- ⑥木原学士 (人事彙報) 同上誌 1895; 898: 1077  
木原は公立人吉病院の第8代院長を務めた<sup>⑥</sup>.
- 【③球磨郡教育支会編. 公立人吉病院 (第二編 人文界, 第九章 衛生及体育, 第四節 医療機関). 球磨郡史 上巻 (1941). 東京: 名著出版; 1973. p.621-622】
- ⑦職員録 (内閣官報局) を通覧すると, 明治三十年 (乙) 版には福岡病院外科部長として木原の名前があり<sup>⑦</sup>, その前年, 翌年の同書には外科部長自体記載がないので, 福岡病院勤務はごく短期であったと推定できる.
- 【⑧外科部長 (福岡県, 福岡病院). 職員録明治三十年 (乙). 印刷局; 1897. p.319】
- ⑧東京帝国大学編纂兼発行. 木原岩太郎 (第十八章 大学院学生姓名医科学生). 東京帝国大学一覽 従明治三十二年 至明治三十三年. 1900. p.366
- ⑨木原学士 (人事彙報). 医事新聞 1899; 538: 45
- ⑩木原岩太郎. 腹壁ノ「アクチノミコオゼ」ノ実験ニ就テ. 東京医学会雑誌 1895; 9(2): 41-43, 9(3): 112-118, 9(5): 190-196, 9(6): 249-254
- ⑪森健. わが国における医真菌学の歩み: 内科領域を中心として. 日本医真菌学会雑誌 2008; 49(1): 5-25
- 9) 松浦医学士の書翰 (雑報). 鎮西医報 1900. 45: 32-35
- 10) 舊本県球磨郡立人吉病院院長医学士木原岩太郎 (雑報). 鎮西医報 1900; 45: 32.
- 11) 医学士木原岩太郎氏 (雑報). 医事新聞 1900; 577: 795
- 12) 小田皓二. 明治の留学悲話 (上) 一坂田快太郎の記録より一. 日本医事新報 1993; 3587: 63-65
- 13) 野田, 山根両氏 (人事彙報). 東京医事新誌. 1900; 1154: 889  
当時野田は内務省衛生局技師, 防疫課長<sup>①</sup> (のち医務課長<sup>②</sup>) であった. なお今回の山根<sup>③</sup>, 野田の外遊に際して, 5月14日に木原岩太郎, 松岡道治ら山口県出身者は送別会を開いている<sup>④</sup>.
- ①印刷局編集兼発行. 野田忠廣 (内務省衛生局, 技師). 職員録 (甲) 明治三十四年; 1900. p.62
- ②同上書. 明治四十四年; 1911. p.124
- ③山根学士の送別会 (雑報). 東京医事新誌 1900; 1154: 890
- 14) 第一回万国医務会議 (雑報). 東京医事新誌 1900; 1173: 1753  
本会議の正式名称<sup>①</sup>にある“*déontologie médicale*”の *deonto-* (*δέοντ-*) とは「なさねばならないこと (道徳的義務論)<sup>②</sup>」を意味し, 1845年 Max Simon によって初めて提唱された<sup>③</sup>. この会議の目的は, 医師の義務と権利との問題を研究し, 医療上の諸法規を創設し, 各国に専門の委員会を設立して万国委員会を結成することであった<sup>④</sup>.
- ① I. Internationeler Congress für die ärztlichen Standesinteressen (“Congrès international de médecine professionnelle et de déontologiemédicale”) in Paris, 23-28, Juli 1900 (Standesangelegenheiten). Deutsche Medizinische Wochenschrift. 1900; 26(16): 266-267
- ② Loudon RB. Toward a genealogy of deontology. Journal of Historical Philosophy 1996; 34(4): 571-592
- ③ International congress of medical deontology. British Medical Journal 1900; II: 256-257
- ④ 齋藤会長: 万国医務大会. 京都医事衛生誌 1901; 82: 16-21
- 15) 巴里に於ける第十三回万国医学会概要況 (雑報). 同上誌 1900; 1175: 1836-1839
- 16) 欧米の火葬場数. 京都医事衛生誌 1899; 1082: 66  
明治32 (1899) 年におけるドイツの火葬場はゴータ, ハイデルベルヒ, 漢堡 (ハンブルグ) の3カ所だけであった.
- 17) 故医学士木原岩太郎氏の追悼会. 医事新聞 1901; 582: 160-164
- 18) 木下広次宛道治書簡. 京都大学大学文書館 > 個人資料 > 木下広次関係資料 > 書簡. 資料番号: 木下-314-1. (平成24年3月16日掲載許可)
- 19) 第一高等学校編兼発行. 幹部表. 第一高等学校六十年史; 1939. 巻末  
木下校長の在任期間は明治22 (1889) 年から同25 (1892) 年であった.
- 20) 奥沢康正. 京都医事衛生誌と竹岡友仙. 医譚 2005; 5033-5035  
京都医事衛生誌は, 京都医会により竹岡友仙を実質上の編集長として明治27 (1894) 年4月に創刊され, 京都の医事衛生の出来事をすべて掲載した. 昭和17年2月, 第574号をもって終刊となった.
- 21) 広告. 謹賀新年. 京都医事衛生誌 1911; 202: 97
- 22) 京都帝国大学編集兼発行. 医科大学職員. 京都帝国大学一覽 従明治四十四年 至明治四十五年; 1912. p.55-68
- 23) 田中義一 (元治元 [1864] 年-昭和4 [1929] 年)<sup>①</sup> は長州萩の下級藩士の家に生まれ, 陸軍大学校を明治25 (1892) 年に卒業した. 大正7 (1918) 年陸軍大臣, 同10 (1921) 年陸軍大将となり, 大正14 (1925) 年に政友会総裁に就任, 昭和2 (1927) 年第26代内閣総理大臣を務め, 昭和4 (1929) 年辞職後は貴族院

議員となった。

- ①河谷從雄. 附正二位勲一等功三級陸軍大将男爵 田中義一君略年譜. 田中義一傳. 東京: 田中義一傳編纂所; 1929. p. 1-14
- 24) 山谷徳治郎(慶応2(1865)年—昭和15(1940)<sup>①,②,③</sup>は岡山県真庭郡勝山町に生まれ, 明治18(1885)年に岡山県立甲種医学校を卒業して, 明治21(1888)年に東大医学部選科(病理学教室)に入学した. 明治25(1892)年に『国家医学』, 翌年に『医海時報』を発刊した. 明治30(1897)年津山で一旦開業したのち, 明治40(1907)年から2年間ドイツへ留学, ドクトル・メデイチーネの称号を得た. 『日新医学』(創刊明治44[1911]年), 『医事公論』(同明治45[1912]年), 『臨牀医学』(同大正2[1913]年), 『医薬新報』(同昭和3[1928]年)と医学雑誌を次々と創刊したほか, 本邦初の医学講習会を開催(明治43[1910]年)し, 多くの医学書を発行した. 大正13(1924)年から衆議院議員を1期務めた.
- ①岡山大学医学部百年史編集委員会. 三, 山谷徳治郎(第五部 回想幾星霜, 第1章 異色の教官および卒業生). 岡山大学医学部百年史. 岡山大学医学部創立百年記念会; 1972. p. 624-625
- ②本誌主幹山谷徳治郎博士逝く 青山斎場で盛大な社葬告別式. 医事公論 1940; 1453: 1672-1676
- ③山谷太郎編. 故山谷徳治郎年譜. 故山谷徳治郎一周忌追悼奠誌. 東京: 日新医学社; 1941. p. 4-5
- 25) 二階堂保則(慶応元[1865]年—大正14[1925]年)<sup>①</sup>は新潟県南蒲原郡加茂町(現・加茂市)の出身で, 明治32(1899)年から内閣統計局に勤務した<sup>①</sup>.
- ①二階堂つるの編輯兼発行. 一, 略歴(附録). そのおもかげ. 1926. p. 1-6
- 26) 松岡博士の饗宴. 京都医事衛生誌. 1909; 189: 32-33
- 27) 都ホテル編集兼発行. 年譜, 明治42年. 都ホテル100年史; 1989. p. 304
- 28) 京都帝国大学編集兼発行. 京都医科大学職員. 京都帝国大学一覽 従明治四十二年 明治四十三年; 1909. p. 65-75
- 29) 「池田(鹿)」と印刷されているが, 池田廉一郎(明治3[1870]年—昭和5[1930]年)<sup>①,②,③</sup>の誤植である. 池田は近江国水口町(現・甲賀市水口町)に生まれ, 明治29(1896)年に帝国大学を卒業し, 明治31(1898)年に第二高等学校教諭<sup>④</sup>, 明治33(1900)年に私立熊本医学校教師<sup>⑤</sup>, 明治35(1902)年に京都府医学校教諭<sup>⑥</sup>に任ぜられ, 同37(1904)年から2カ年間ドイツへ留学した. 本招宴の2年後(明治44[1911]年)に新潟医学専門学校教授に転出し, のち同校2代目校長, 新潟医科大学初代学長を務めた<sup>⑦</sup>.
- ①衛生新聞社編. 池田廉一郎. 関西杏林名家. p. 94-95
- ②井関九郎. 医学博士 池田廉一郎. 注6①. p. 94-95
- ③井関九郎. 池田廉一郎, 秦勉造. 注6②. p. 外科 204-305
- ④東北帝国大学医学部良陵会. 池田廉一郎(第三章 第二高等(中)学校医学部時代(明治二十一年四月—三十四年三月)教官, 外科学). 東北帝国大学医学部前史(良陵第三十三号(創立二十周年記念号)別刷); 1918. p. 39
- ⑤山崎正董. 私立熊本医学校職員録(第六章 私立熊本医学校, 第五節 職員及び生徒, 一, 職員). 肥後医育史. 熊本: 鎮西医海時報社; 1929. p. 577
- ⑥土屋栄吉. 六 教諭(医学校時代). 京都府立医科大学創立八十周年記念事業委員会編輯兼発行; 1955. p. 218
- ⑦新潟大学医学部五十周年記念会編集兼発行. 池田廉一郎(第一部 新潟大学医学部沿革史, [七]官立新潟医学専門学校時代, (四)終末期(池田校長時代)). 新潟大学医学部五十年史; 1962. p. 319-320
- 30) 齋藤仙也(安政6[1859]年—大正9[1920]年)<sup>①,②,③,④</sup>は, 丹後竹野郡吉沢村大字吉沢(現・京丹後市弥栄町吉沢)の医家(旧姓古川)に生まれ, 10歳にして京都へ出て伯父新宮涼閣<sup>⑤</sup>の教育を受ける. 明治15(1882)年に東京大学を卒業し, 同年京都府医学校一等教諭(内科学)兼療病院内科部長となった<sup>⑥</sup>が, 明治21(1888)年に辞して市内で開業した<sup>⑦</sup>. その後齋藤は, 京都医会<sup>⑧</sup>会長(明治33[1900]年)<sup>⑧</sup>, 京都府医師会長(府令[明治34[1901]年], 法定[明治35[1902]]<sup>⑨</sup>)などの要職を歴任し, 大正5(1916)年には大日本医師会<sup>⑩</sup>の筆頭副会長に就任した<sup>⑩</sup>.
- ①桜井敬太郎, 佐野精一, 手嶋閣. 齋藤仙也君伝. 京都府下人物誌 第一編. 京都: 金口木舌堂; 1891. p. 41-46
- ②故齋藤仙也氏葬儀. 京都医事衛生誌 1920; 312: 30-31
- ③田中秀三. 齋藤仙也先生小伝. 同上誌 1920; 315: 前付
- ④噫 齋藤仙也翁逝く(雑報). 医海時報 1920; 1357: 1000-1001
- ⑤新宮涼閣(文政11[1828]年—明治18[1885])は丹後田辺(舞鶴)藩士の家に生まれて新宮涼庭に学び, その養子となった<sup>④</sup>.
- 【③京都府医師会医学史編纂室編. 涼庭の学統(第7篇 江戸時代後期の医学・医療, 第5章 京都洋学各論, 第十節 新宮涼庭). 京都の医学史. 京都府医師会; 1980. p. 721-723】
- ⑥土屋栄吉. 六 教諭(医学校時代). 京都府立医科大学創立八十周年記念事業委員会編集兼出版. 京都府立医科大学八十年史; 1955. p. 214
- ⑦山口信雄. 町医者としての齋藤仙也先生. 大法輪 1937; 4(9): 290-299
- ⑧京都府医師会医学史編纂室編. 第二節 京都医

会（第八篇 明治時代の医学，医療 第三章 医制の公布と実施）．注28⑤⑥．p.837-838

⑨高橋実編．明治三十三年（第一篇 医師会史 第二 京都医会）．京都市医師会五十年史編纂部編纂．京都市醫師会五十年史；1943．p.5-8

⑩京都府医師会編集兼発行．京都府医師会（府会）（京都府医師会の誕生まで—その前史，京都府医師会の生い立ち）．京都府医師会二十年年史；1968．p.58-59

京都府は，明治34（1901）年に医師取締規則（府令第九〇号）<sup>⑧</sup>を発して医師の組合（京都府医師会〔府令〕京都支部）への強制加入を決めたが，明治39（1906）年に法律四十三号，内務省令三十三号（医師会法）によって郡市，道府県の医師会設立（京都府医師会〔法定〕京都支会<sup>⑨</sup>）が定められた．

【⑧府令第九十号（公報）．京都医事衛生誌 1901；93：12-13 ⑥塩沢香．明治・大正医師会史略．日本医史学雑誌 1969；15(1)：31-49】

⑪大日本医師会は大正5（1916）年に2府37県，東京府15区7郡の代表が集まり，北里柴三郎を会長に推して設立された本邦初の全国的医師団体である<sup>30⑩⑪</sup>．

⑫大日本医師会役員（会報．大日本医師会創立発会式并定時総会）．京都医事衛生誌 1916；272：36-37

- 31) 佐伯理一郎（文久2〔1862〕年—昭和28〔1953〕）<sup>①,②</sup>は肥後国阿蘇郡宮地村（現・熊本県阿蘇市一の宮町宮地）に生まれ，明治14（1881）年に医術開業試験に合格して翌年熊本県熊本医学校を卒業した．その後上京，明治16（1883）年に受洗した．翌年海軍軍医補となり，明治19（1886）年海軍省初の留学生としてペンシルバニア大学医学部に学び，同21（1888）年卒業してM.D.の称号を得た<sup>③</sup>．ついでミュンヘン大学にて産婦人科学を修め，明治24（1891）年に帰国した<sup>④</sup>．翌年同志社病院の外科，産婦人科客員医員となり，また同年京都市内で開業した．明治29（1895）年京都産科婦人科病院（のちの佐伯病院）を設立，翌年同志社病院長，京都看病婦学校長に任ぜられた．明治39（1906）年にこれらが廃止された後は看病婦学校を佐伯病院へ移した<sup>④,⑤,⑥</sup>．大正4（1915）年発足の近畿婦人科会（のちの関西婦人科学会）の創立に関わり<sup>⑦</sup>，昭和13（1938）年開催の第36回日本婦人科学会（日本医学会総会第二十六分科産科婦人科学会）の会長を務めた<sup>⑧,⑨</sup>．

①松崎八重．京都時代．阿蘇が嶺のけむり：明治の開業医佐伯理一郎小伝．京都：佐伯よし子；1971．p.36-46

②長門谷洋治．佐伯理一郎と京都—『日誌抜萃』を中心に—（一）．啓迪 1989；7：9-13

③阿知波五郎．佐伯理一郎（一八六二—一九五三）留学日記（米・独・奥・英）．日本医史学雑誌 1972；18(3)：183-186

④長門谷洋治．佐伯理一郎と京都—『日誌抜萃』を中心に—（二）．啓迪 1990；8：25-29，

⑤京都府医師会医学史編纂室編纂．第三節 佐伯理一郎（第八篇 明治時代の医学・医療，第五章 同志社病院と京都看病婦学校）．注28⑤⑥．p.888-892

⑥京都府医師会医学史編纂室編纂．終局（第五章 同志社病院と京都看病婦病院，第二節 設立・活動・破局）．注28⑤⑥？．p.883-884

⑦佐伯理一郎．佐伯理一郎と京都（四）—近畿婦人科学会など—．啓迪 1992；10：49-54

⑧長門谷洋治．佐伯理一郎と京都（三）—第一〇回日本医学会総会・他—．同上誌 1991；9：20-24

⑨佐伯理一郎．開会ノ辞（第36回日本婦人科学会総会記事）．日本婦人科学会雑誌 1938；33(5)：718-722

- 32) 新宮涼亭（安政元〔1854〕年<sup>①</sup>—大正11〔1922〕年<sup>②</sup>）は新宮涼庭本家の三代目に当る<sup>③</sup>．明治14（1881）年に東京大学医学部を卒業し，翌年京都府医学校一等教諭に任ぜられた<sup>④</sup>が1年後に市内で開業した．明治33（1900）年に一時教諭に復帰して内科診断学を教えた<sup>④</sup>．

①日本杏林社（京都）著作兼発行．新宮涼亭（京都府京都市上京区）．日本杏林要覧；1909．p.京都167

②高橋實編．新宮涼亭（第九編 史外録，第十一 京都医家と其の墳墓）．注29⑨．p.891

③山本四郎．本家（第二部 各論，第七章 涼庭雑俎，第四節 一族と後裔）．新宮涼庭傳．京都：ミネルヴァ書房；1968．p.251-252

④京都府医学校教諭の異動（雑報）．京都医事衛生誌．1900；76：26．

- 33) 同日は京都府医師会総会<sup>①</sup>が午後3時から祇園中村楼で開催され，夕刻から余興があり，散会は午後9時過ぎであったとされている<sup>②</sup>ので，医師会来賓であった荒木寅三郎医科大学長や伊藤隼三附属医院長，さらに京都府医師会首脳らは，午後7時からのこの饗宴のためにそれを中座したものと考えられる．

①第三次総会（会報 京都府医師会 会報）．京都医事衛生誌 1909；189：16-17

②京都府医師会総会．日の出新聞（明治42年11月22日）；8072：2

- 34) 廣谷速人．京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績，業績．第一報 京都大学整形外科学教室の創立．日本医史学雑誌 2005；51(3)：385-408

- 35) 伊藤は明治11（1879）年に鳥取中学校から東京予備門へ転じているが，同12（1880）年から2年間大坂専門学校に在籍したのち，明治14（1882）年に東京大学医学部予備門へ進学している<sup>①</sup>．一方松岡は，第三高等中学校予科を経て第一高等中学校に学んでいる<sup>②</sup>．

大坂専門学校は舎密局(明治2〔1869〕年設置)を源とし、同年設立の洋学校と明治3(1870)年に合併して開成所となり、明治12(1880)年に大阪専門学校、翌年に大阪中学校と改称、さらに明治19(1886)年には第三高等中学校と改称された<sup>③</sup>。一方明治8(1875)年開設の東京英語学校が明治10(1877)年に東京大学予備門と改称され、明治19(1886)年に第一高等中学校となった<sup>④</sup>。

①北浦保憲. 二, 故伊等隼三氏略歴(三, 伊藤家系図及伊藤家歴代略歴). 市立鳥取病院史要. 鳥取: 市立鳥取病院1936. p.25-36

②廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授松岡道治の事績, 業績. 第7報 松岡道治の学歴: 小学校から大学院まで. 日本医史学雑誌1923; 57(4): 403-418

③第三高等中学校印行. 沿革略. 第三高等中学校一覽 起明治十九年九月止明治二十年八月1888. p.1-10

④第一高等中学校編纂兼出版. 第二章 沿革略. 第一高等中学校一覽 自明治二十一年 至明治二十二年. 1890. p.2-4

36) 明治中期から帝國ホテル<sup>①</sup>, 上野精養軒<sup>②</sup>などでの披露宴の記事がある。

①穂積八束氏(帝国大学法科大学教授)の結婚(雑報). 読売新聞. 明治25年9月24日朝刊; 5453: 2面

②建部文学博士(東京帝国大学文科大学教授)の結婚披露(よみうり抄). 読売新聞. 明治35年4月21日朝刊; 8918: 1面.

37) 公益法人京都市文化観光資源保護財団. 映像に見る近代京都の生活文化. ひとの一生. <http://www.lyoubunka.or.jp/photo/hito.html> (平成23年9月22日参照)

38) 下村正太郎氏(大丸呉服店社長)の結婚式. 京都市日出新聞. 大正14年12月17日; 13931: 3面.

39) 山本伊兵衛は宇治山田市(現・伊勢市)の実業家で、株式会社山田銀行<sup>①</sup>の取締役(のち取締役支配人)で、明治33(1900)年にはわが国へ初めて輸入された米国製蒸気自動車ロコモビルを乗合バス用に購入した<sup>②</sup>。また市制発足(明治39〔1906〕年)直後に市会副議長を務めた<sup>③</sup>。

①山田銀行は明治27(1894)年に三重県宇治山田町(現・伊勢市)に設立され、その後近隣の銀行を合併したが、大正8(1919)年に四日市銀行(現・三重銀行)に合併された<sup>④</sup>。

【③東京銀行協会調査部・銀行図書館編纂兼発行。(株)山田銀行. 本邦銀行変遷史: 経済文庫・銀行図書館創設100周年記念; 1998. p.816】

②佐々木烈. 第4章 ロコモビル蒸気自動車の輸入と関税問題. 日本の自動車史 II. 日本の自動車発展に貢献した先駆者達の軌跡. 東京: 三樹書店;

2004. p.84-90.

③宇治山田市役所編纂兼発行. 歴代副議長(第三章 明治維新以後, 第三節 三重県治下). 宇治山田市史 下巻; 1929. p.238.

40) つな(都奈<sup>①</sup>, 正しくは変体仮名. 綱子)夫人は、明治19(1886)年生まれで、日本女子大学校出身である<sup>①, ②</sup>。なお日本女子大学校(現・日本女子大学)の創立者、成瀬仁蔵は山口県吉敷郡吉敷村字赤田(現・山口市吉敷赤田)の出身で、明治9(1876)年に山口県教員養成所(山口県師範学校の前身)を卒業(第二期卒業生)し<sup>③</sup>、直ちに室津小学校へ訓導として赴任し、半年間務めている<sup>④</sup>。

①井関九郎. 松岡道治. 現代防長人物史 人. 発展社; 1917. p.110-111

②松田元介. 病院長 医学博士 正五位 勲六等 松岡道治. 防長人士発展鑑. 山口: 山都房; 1936. p.307

③山口県師範学校編纂兼発行. 第二期卒業生(卒業生姓名)山口県尋常師範学校一覽; 1899. p.89

④中村政雄編. 付録二 日本女子大学校年表. 日本女子大学校四十年史. 日本女子大学校; 1942. p.551-565

41) 松岡家戸籍謄本(戸主: 松岡藤蔵, 同章一, 同道治. 私信, 松岡昭三〔大阪市〕・国雄〔西宮市〕両先生, 平成22年5月28日)

42) つな夫人との結婚の前に、松岡は佐藤信寛<sup>①</sup>の仲介で益田の醤油醸造家の子女と結婚したことがあるとする伝聞が地元にある<sup>②</sup>が、戸籍<sup>④</sup>によれば、松岡の実兄章一の後妻リツ(島根県益田町, 増野近助の妹. 明治42〔1910〕年入籍)と混同されているのではないかと考えられる。

①佐藤信寛(文化12〔1816〕年—明治33〔1900〕年)<sup>②</sup>は藩役職を歴任し、明治3(1870)年から明治9(1896)年まで浜田県, 益田県の権知事, 権令, 島根県令を務めたのち勇退した。

【③山口県文書館内山口県地方史学会編纂. 蝦洲翁事略. 佐藤寛作手控. 東京: 佐藤栄作; 1975. p.174】

②笠井宗一郎. 松岡道治教授の故郷とその時代. 京都大学整形外科学教室開講百周年記念誌編集委員会編纂兼発行. 京都大学整形外科学教室開講百周年記念誌; 2007. p.72-84

43) 評議員会(第十四回学会記事). 日本外科学会雑誌1913; 14(1): 7-8.

44) 三輪徳寛(安政6〔1859〕年—昭和8〔1933〕)<sup>①, ②, ③</sup>は尾張国海西郡早尾村(現・愛西市早尾町)の医家に生まれ、明治19(1886)年に東京大学医科大学を卒業した。同大学院に入学、明治21(1888)年助手となり、翌年第一高等中学校医学部教諭に任ぜられ<sup>④</sup>、明治30(1897)年から2年間ドイツへ留学。同34(1901)年改称された千葉医学専門学校教諭に任ぜられた<sup>⑤</sup>。



大正3(1914)年千葉医科大学学長, 大正12年(1923)千葉大学初代学長に任ぜられ, 大正13(1924)年退官した<sup>④, ⑤</sup>.

①井関九郎. 医学博士 三輪徳寛. 注6①. p. 医博43-44

②井関九郎. 三輪徳寛, 下平用彩. 注6②. p. 外科302-304

③三輪徳寛先生伝記編纂会編兼発行. 年譜. 三輪徳寛; 1938. p. 8-23

④鈴木正夫. 四 第一高等中学校医学部時代(医学部の沿革, 前医専時代I). 千葉大学医学部創立八十五周年記念会編集委員会. 千葉大学医学部八十五年史; 1964. p. 11-19

⑤綿貫重雄. 第一外科教室史(臨床医学教室史). 同上書. p. 373-387

- 45) 山形仲藝(安政4[1857]年—大正11[1922]年)<sup>①, ②</sup>は越前国足羽郡の出身で, 東京大学南校を経て明治14(1881)年に帝国大学を卒業し, ただちに岡山県医学校教諭兼県病院副院長に任ぜられた<sup>③</sup>が, 明治20(1887)年に第二高等中学校医学部へ転任, 宮城県病院長に任ぜられた<sup>④</sup>. 明治30(1897)年から2年間ドイツへ留学し, 明治34(1901)年には仙台医学専門学校校長となった. 大正4(1915)年東北帝国大学医科大学教授, 医科大学学長に任ぜられ, 大正7(1918)

年に依願免官となった<sup>④, ⑤</sup>.

①井関九郎. 医学博士 山形仲藝. 注6①. p. 医博67

②東西医学社編輯部纂著. 山形仲藝. 日本医学博士録. 東京: 皇国図書株式会社創立事務所; 1944. p. 542

③岡山大学医学部百年史編集委員会編. 山形仲藝(第2部 岡山大学医学部沿革史, 第5章 岡山県医学校, 一 医学教場から医学校と改称). 注23①. p. 156-157

④東北帝国大学医学部良陵会. 山形仲藝(教官, 外科学). 注29④. p. 38

⑤東北帝国大学医学部良陵会. 山形仲藝. 注29④. p. 30

46) 第15回総会. 日本外科学会雑誌2000; 101(日本外科学会100年誌. 臨時増刊号): 86

47) 第18回総会. 同上誌. p. 94

48) 小林晶. 九州における近代整形の祖, 住田正雄一八七八—一九四六)の生涯. 日本医史学雑誌1999; 45(4): 563-584

49) 天児民和. 住田正雄教授. 注5①. p. 420-423

50) 住田正雄. 関節結核(宿題). 日本外科学会雑誌1914; 15(2): 236-290